

筑紫野の

おしがたもんどき

押形文土器

今から約1万年前、日本列島は永い氷河期が終わりを告げ、次第に温暖な気候となってきました。現在に近い気候となり、降雨量も増えました。山林には杉類などの針葉樹が少なくなり、照葉樹が目立つようになりました。それまで樹木が少なかった河川流域や低地の平野部には茅かやなどにかわって樹林が繁るようになりました。こうした自然環境のなかで旧石器時代人は新たな生活様式を生み出さなければなりません。それまでの投げ槍を用い、集団で原野を駆け回る狩猟は、樹木の生い茂る中では効果が薄くなり、一方で新たな食料として山芋などの根茎類やドングリなどの堅果類が多量に手に入るようになりました。こうして彼らはこれまでの旧石器文化を基礎としながらも新たな環境に対応した「縄文文化」を開花させます。

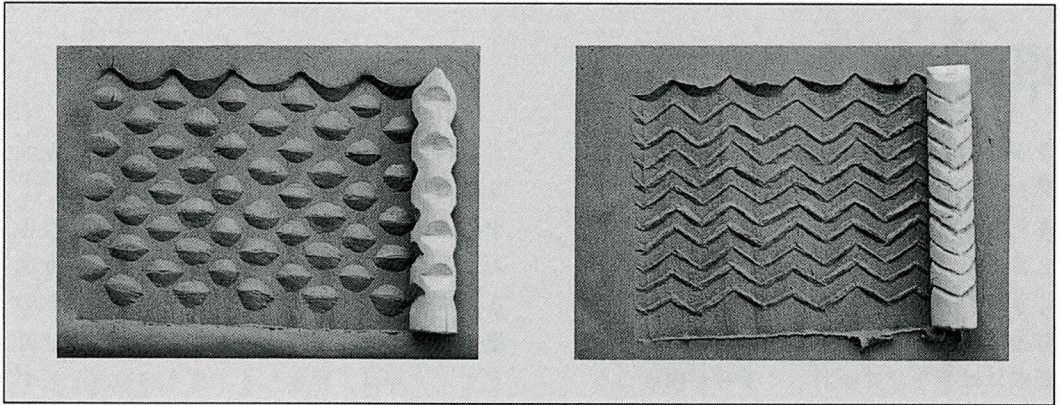
その第一は、弓矢を使いはじめたことです。生い茂る草木に身を潜ませ、離れたところか

ら獲物を仕留めることができる弓矢は画期的な道具でした。第二は粘土を焼き固めて器うつわを作ったこと、つまり土器を使うようになったことです。土器の登場は、歴史上、画期的な大事件でしたが、どのようにして土器が登場するのかは、まだはっきりしていません。さて、土器は、器として、また調理具として、食の形態を大きく変化させることになりました。さらに、粘土を使うために自由な意思の表現が可能となり、土器に装飾を施したり、のちの土偶に見られるように縄文人の精神生活にも大きな影響を与えました。

ここで、紹介する押形文土器は筑紫野市内で発見された最も古い土器で約8,000~6,000年前に使われたものです。この土器は日本列島のほぼ全域で見られ、時間的にもかなり長期間にわたり使われていました。特に九州では他の地域よりも長く使われました。この土器の特徴は直径0.5~1 cmほど、長さ数cmの



▲天山・小賀谷採集の押型文土器



▲押型文の文様は、文様を刻み込んだ棒を転がして付けていました

棒に刻み目を入れ、それを転がすことにより、土器の表面に楕円形や山形、格子目の連続する文様を入れていることです。土器の形は概ね底がすぼまる砲弾形をしていましたが、九州で特徴的に見られる新しい時期の押型文土器は平らな底になっていました。

押型文土器に施される文様も最初は細かく均整の取れた形をしています。やがて、粗大な文様に変化していきます。遺跡からは押型文土器のほか、なにも文様を施さない土器

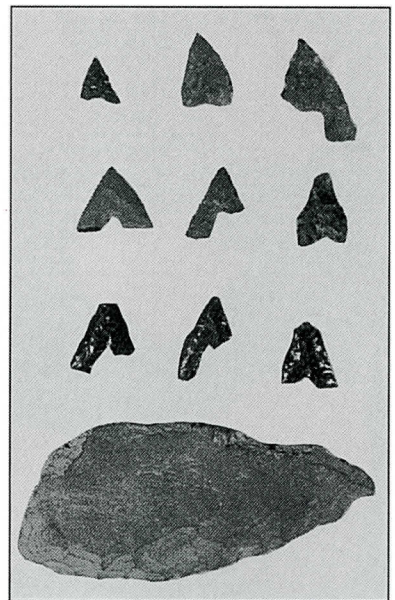
も出土します。用途が異なったのでしょうか。土器のほかには矢の先につけるやじりや獲物を解体したり、肉を切り分けたりするときに使う石器などが出土します。

筑紫野市内では、ほぼ全域から発見されていますが、特に萩原、天山、小賀谷、原からは、まとまって出土しています。

押型文土器を使用した人々は、みごとに新しい環境に適合し、縄文文化の基礎を作ったと言ってよいでしょう。



▲大分県菅無田遺跡出土の押型文土器



▲天山・小賀谷採集の石器